



森税理士の「ちょっと気になる税務のはなし」

第48回

アグリビジネス・ソリューションズ株式会社
代表取締役 森 剛一氏

税務相談窓口
事業推進課 経営指導相談係
■問い合わせ先
TEL: 0824-64-2072 Fax: 0824-64-2233

税金で得する家族経営法人の運営方法

1 役員報酬の適正設定

法人化した場合、法人に利益を内部留保することが重要です。しかし、法人には、法人税のほか法人住民税、法人事業税(注)が課税されます。農業経営基盤強化準備金を活用できる場合、税負担なしで内部留保することができますが、準備金を活用できない場合には、法人税等を負担してでも一定の内部留保をする覚悟も必要です。

内部留保と分配のバランスをどう取ったらよいでしょうか? そのうえで、考慮したいのが法人における実効税率です。法人税と法人事業税は、課税所得(利益)が増えると税率が上がります。法人の課税所得が年800万円を超えると大きく実効税率が上がります。

また、年400万円を境に若干、実効税率が上がります。このため、年400万円程度が法人の利益として一つの目標となります。(表参照)

一方、役員報酬には、所得税がかかります。ただし、役員報酬など給与収入からは給与所得控除が差し引かれます。給与所得控除は給与収入に応じて増えます。例えば、給与収入が360万円のときの給与所得控除は126万円、1,000万円のときは220万円です。代表者の役員報酬が月額100万円だと年間の給与収入が1,200万円となりますが、この場合の給与所得控除が230万円、基礎控除などの所得控除が仮に70万円とすると、課税所得金額が900万円になります。

所得税は累進課税となっていますが、課税所得金額が900万円までは、税率が33%(所得税23%+住民税10%)に留まり、給与所得控除を考慮した個人課税の実効税率が法人課税の実効税率(30%程度)と同程度か下回るため、役員報酬を増額した方が有利になります。ただし、自己資本の充実のためには、役員報酬を増資に振り向けたり、役員長期借入金として法人に内部留保したりする必要があります。

2 農業経営基盤強化準備金の活用

農業経営基盤強化準備金については、損金経理により負債の部に引当金として計上する方法(引当金経理方式)と剰余金処分により純資産の部に任意積立金として計上する方法(積立金経理方式)とがあります。家族経営を農事組合法人として法人化した場合であっても、従事分量配当制を採ることはほとんどありませんが、従事分量配当制の農事組合法人でない限り、経理方式はどちらを選択しても構いません。

損金経理引当金経理方式は、経理がわかりやすい反面、農業経営基盤強化準備金繰入額が損益計算書に記載されて、その分の当期純利益が減少します。この場合、課税所得をゼロにするためには、赤字の決算になってしまいます。一方、剰余金処分積立金経理方式は、剰余金処分の方法に慣れる必要がありますが、損益計算書は黒字のまま課税所得をゼロにできるというメリットがあります。

表. 法人課税の実効税率

種別	法人税	事業税	都道府県民税	市町村民税	実効税率
年所得金額					
400万円以下	22%	5%	法人税額の5% + 2万円	法人税額の12.3% + 5万円	29%
400万円超 800万円以下		7.3%			31%
800万円超	30%	9.6%			41%

注. 平成21年度税制改正による中小法人等の軽減税率は考慮していない。



「世の男性の皆さんへ、 女性の『分娩』への理解を深めましょう」

ちょっと聞いてよ!

JA西日本くみあい飼料株式会社広島営業所 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

牛の分娩に遭遇するといつも、母牛の激しい怒責と唸り声、全身を震わせる苦悶の表情から、分娩はかなりの痛みと苦しみを伴うものであるうと想像します。私自身は男性である故、自分で分娩を体験することは不可能で、分娩時の『感覚』は想像するしかありませんが、人間の分娩・出産の話聞いても、個人差はあるものの、その陣痛や腹圧の痛み・辛さは強烈で、この世のものとは思えなかつたと言う『先輩ママ』もいるようです。

ある酪農誌のコラム記事に、「家畜の分娩過程は、痛みの変化の進捗と見なすことができる」との記述がありました。それによると分娩初期の痛みは、子宮頸管の拡張と下垂した子宮の膨張の刺激による内臓痛を主とします。そして分娩が進むと、膣周囲の骨盤組織が膨張し、続いて骨盤底の圧迫によって骨や筋肉の痛みへと変化します。

しかし興味深いことに、牛は妊娠末期や分娩時において、体内で内因性のモルヒネ様物質が湧出し、痛みに対する感受性が低下して痛覚が麻痺するの



です。モルヒネは古くから知られた鎮痛薬ですが、牛では羊水にも胎盤性のモルヒネ様因子が含まれており、分娩直後に新生子牛を舐めることで、母牛はそれを口から摂取し、痛みがさらに軽減されると考えられています。

重度の痛みを伴う難産などでは、産褥期の採食量や乳量が低下し、直腸や膣の損傷から繁殖性も悪化します。そこで分娩後に鎮痛薬を投与し、痛みを軽減させることで、その後の生産性を改善させる試みが実施されました。しかし分娩後の三日間に非ステロイド性抗炎症薬の鎮痛薬を連続投与した調査では、分娩後の採食量は低下したままで、泌乳量は向上しませんでした。

同じく分娩時とその二十四時間後に鎮痛薬を投与した場合でも、胎盤滞留の発生こそ低下したものの、泌乳量

や繁殖性に変化はありませんでした。よって「分娩時の痛みは生産性を低下させるが、その痛みを軽減させるべく鎮痛剤を使用しても生産性への効果は無い」と導かれ、分娩に関わる痛みの生理は非常に複雑だと推測されるのです。

女性の分娩に対する想いを理解しようとインターネットを開くと、「未来のママへのエール」と題した先輩ママからのメッセージのページがあり、そこには「出産は女性だけが経験できる素晴らしい体験。」

医学が進歩しても出産だけは昔と変わらず女性が痛みを耐えて産むもので、出産を乗り越えることは素晴らしいこと。ただ産んだ後の方が、産むまよりも大変だという事を忘れないように」とありました。

この気持ちは人間ママだけでなく『乳牛ママ』も同じなのかもしれません。「産んでからが大変」だからこそ、分娩を迎える母牛に対して私たちは『産む前の管理』をしっかり行うことが大切だと改めて思うのです。